私本

松井田城落城記

「大道寺駿河守合戦記 并落城之事」

大道寺駿河守政繁 公（禅陀寺蔵）

小板橋治德家蔵版

はじめに

小板橋　治徳

この「私本松井田城落城記」は我が家で発見された松井田城落城記です。

和綴じの表紙に、題簽（だいせん）が取れていた為、落城記とは分かりませんでした。内容は二部構成で、一部は「北条氏政物語并江雪入道物語」で、二部が「大道寺駿河守合戦記并落城の事」（本編・以下「私本落城記」と言う）と別れております。古文書解読の未熟から、最初の表題「北条氏政物語并江雪物語」だけと判断して、見過ごしていたものです。

この「私本落城記」は小林文男氏の『松井田城落城記（大道寺日記）』及び『碓氷郡志』の「松枝城落城記」に大半は類似した内容であります。江戸時代末期に口述筆記又は写本したものと思われます。

虫喰い、あて字や不明の文字等もあり、相当難解な文面でしたが、萩原榮司先生のご好意により解読され、さらに読み下し文にして頂き、日の目を見ることが出来ました。本当にありがたく感謝しております。

戦国末期の松井田城の攻防戦を江戸時代の軍記読み物として、楽しみながらお読み頂ければ幸いです。

平成二十六年十月

文末部分

文頭部分

当家に残る「私本 松井田城落城記」（「大道寺駿河守合戦記并落城之事」）原本

「私本　松井田城落城記」（小板橋治徳氏蔵）

読み下し文　　萩原榮司

大道寺駿河守合戦記並びに落城の事

頃は天正十八年二月末方、初め三月五日合戦始まり、加賀、上杉、信州三組の勢、合わせて五万六千餘騎、碓氷峠より坂本に充満せし所に、上州松枝の城主大道寺駿河守政繁、嫡子新四郎政時、三千餘騎にて立て篭もり、城を堅固にして上方勢の寄手を待つ所に、北国勢は坂本に出張りしてかからんともせず、城の容害を伺ひ備へたり。

大道寺駿河守諸軍に向ひ申しけるは、「我、今城に安閑として待つ事、味方のつたなきに似たり。出向い致し、一戦に味方の意をしめし、敵の強弱をさぐり、味方引き篭り砦を守り謀をもって討ち取るべし」と、その用意を催し、二千餘騎を随え坂本に陣を取り待ちかけたり。

是を見て、信州三組の内、真田安房守正幸（昌幸）は、松平（依田）修理之助安重、一、二の備えをもって相寄る。真田安房守は小笠原使を立て、「われ依田と多勢をもって合戦始むべし。足下の手をかい廻り、松枝の馬手の方より寄せ給え」と、言い送りければ、下知を随え備え出して控え居る。

時に、眞田の先陣には伊勢崎藤右衛門、持月（望月）金右衛門、森山小左衛門、大塚清右衛門。大道寺が郎党山添郷右衛門、四尺余りの大太刀を眞向にさしかざし、伊勢崎が手に切り込む。東西に渡り南北に馳せ廻り火花を散らして戦えば、さしもの伊勢崎開きのき、二の手に渡し引き退く。

是を見て、大道寺軍は味方の勝ったりと籏本を押出し、依田が手勢へ打って懸る。

中にも小玉五郎左衛門、鈴木新左衛門、三保崎九郎兵衛等、名をあらわしたる大道寺が軍将ども突立てつきたて戦えば、依田が勢、大いに乱れて真田もここに乱れんとする所に、時分はここぞと小笠原勢、山の手をかい廻り、松枝の弓手（ゆんで）の方より時の聲をどっと揚げて無二無三に切り込んだり。松枝勢不意を討たれ、備えしらけて見えにける。

景勝も味方を進み下知あれば、藤田能登守、安田上総之助、真先に進み猛威を振い戦えば、此勢いに崩れ立って見えけるを、信州三組の勢、前後左右に責め立てければ、松枝勢散々になって、駿河守すでに危く見えける所に、嫡子新四郎、生年十八歳、血気盛んの英雄。其の日の出で立ちは、卯の花おどしの鎧、同じ毛の五枚兜、猪首（いくび）にきなし、鹿毛の駒、九寸ばかりの逸物に鞭を加え奮迅、阿闍梨王の荒れたる如く、向かう者を突き落し、弓手に突き、右手に打ちて忽ち二十騎を討ち取って一筋の血路を開き、難無く父を救ひ出せし。其の勢いに上方勢、手差す者無く中を開き通しけり。父の難儀を救ひ出せし事、古今稀なる者と人々感じける。しかりといえども、我敵味方をくらぶれば危うかりし次第なり。

真田源次郎幸村、諸軍に下知し、「敵の新手替わりなば大事なり。疲れたる者は後へ残れ、我と思わん者は続けや。」と、粕毛の駒に打ち乗り十文字の槍を掲げ真一文字に大道寺が本陣を目掛け乗り進む。郎等は、穴山小助、望月宇右衛門、別府若狭守、相従いおとらじと打ち入りたり。大将幸村一陣に槍を上げると見えしが、忽ち敵三騎を突き落とし、大将を目掛けて進みける。

大道寺新四郎これを見て、「憎き敵の振る舞いかな、大道寺新四郎ここに有り。」と、同じく槍を捻って向こうたり。幸村にっこと打ち笑い、「やさしき敵の振る舞いかな、井の中の蛙、武勇の蛇のえじきにならしてくれん。」と、両方一混ぜもせず一世一代火花を散らして勇士の戦い、虎の風を起こし龍の浪を別ける勢いにて何

れ勝負見えざる所に、新四郎、真田が槍を受け損じ肩先突かれ馬よりどうと落ちたる所を二手の槍を突く所を倒れながら袖に受け止め、槍塩首しっかと取り、是をたよりに上がらんとしければ、流石の幸村槍をゆるめて太刀を抜き片手打ちに真っ向微塵と打ち下ろす。新四郎心得たりと真田が槍をかぜに受けて同じく太刀を抜き片手に真田が馬の足を殴る。馬は倒れ真田馬より落ちける。早業なればひらりと越えたり。

これを見て、「主人討たすな者共」とて双方馳せ入り、その内、山添郷右衛門四尺余りの太刀打ち振って両将の間に立ち入り、「この者我等に遣わすべし。」真田に打って掛かる。　この時、新四郎肩先に疵をうけ戦い疲れて引馬に乗り替え一足も引くけしきこれなし。真田大いに怒り、「我一念の掛かりし敵、何やつなれば妨げ成す。」と、十文字の槍にて太刀引き懸け迫り寄せてむずと組み、もみ合いせしが、幸村敵の上帯につかみ引き懸け味方の方へ投げ込んだり。別府若狭守起こしも立たず首かき切って切っ先に貫き大音に名乗りたり。

さて、松枝の方には、山添討たれ大いに気を失い裏崩れしければ、大将駿河守陣を明けて引き退く。

上方勢はその機に乗り追討してその勢い大山の崩るるが如し。中にも越後勢、藤田能登守、安田上総之助、真っ先進み出で追いかけたり。されども大道寺も智勇の名将、小玉五郎左衛門、鈴木新左衛門、三保崎九郎左衛門なんど後詰めとしてしずしずと引き退く。信州三組の面々、敵地の利を見定め、これまでなりと勢を集め坂本へ備えを押し戻し、小高き山を見定め陣場を渡し、三組の面々碓氷坂本に宿を陣す。

翌日は坂本より一里過ぎ、城より一里隔て、笛吹川を前として越後勢右の手先、

加賀勢を後陣として左へ備え、信州三組は遠巻きして遙かに後に備えたり。都合五万六千余騎、山里一円に陣を取り家々の物印嵐に飜し、夜は篝火を焚き天をこがし、その勢い目を驚かす。

「この度坂本迄出張りせられ武辺の基を糺されし段、皆の感心致すなり。早速取り巻くべけれども足下の武略を侮るに似たりと存じ、先ず遠巻きを致す者なり。この上は降参致し城を相渡され候わば足下の武威全て子孫繁昌に及ばん。さなくば、一時攻め落さん事心安く候えば、唯足下の武勇を惜しみて斯くは申し送るなり。」と申し遣わしける時に大道寺父子、その口上を聞き、返答には、「弓矢取る身の習い降参は存じ候なれども、是へ押し寄せ給わざる先にこそ侘びも致すべけども、元より討ち死にと思い定めし所なればこの上は早く攻め給え。もっともこの城は功年ある城に候えば、大軍とて御自慢は御無用。たとえ百万騎をもって攻めるとも大軍に恐れて城を開き降参する武士は関東に一人もなし。上方の風とは相違仕る。かなわぬ時は討ち死にす。先ず一戦に勝負を決すべし。」とて使者を戻らしける。使者この由を申し述べ、ならびに城中の有様を見るに、兵粮山の如く積み置き厳重して馬を引き立て、すわと言わば駆け出すべし有様なり、と見届けの趣き物語りけり。

これを聞き、両将大きに怒って、礼をもって申し送るに無礼の条々奇っ怪なり。さあらば一時に城を攻め破らん、と同月八日巳の刻より城を責め、景勝公山の手より追手安中曲輪へ向かい、西の方に備えられたり。加賀勢は搦手へ向かい東の方に備えたり。信州三組の面々北の谷を塞ぎ、南は開けて遙かの末の陣に取り。これは敵方後詰め来たらば押さえ、また城中より落人あらば生け捕りすべし手段なり。

しかるに太閤秀吉公相州へ御着陣なられ、松枝より破るべきと御使者来たりければ、これを聞き大きに勇み、この上は皆々心を励み攻め落とすべし、と陣所〳〵へ

触れ出し、一勢(ぜい)一勢に攻め寄せたり。しかる所に臨城より松枝勢城を救わんと出張りせしかども、上方勢厳しく道を立て切り、中々通るべき事あたわずいたずらに控えたり。

時に城主駿河守請手〳〵へ人を配り四方へ馳せ廻りて下知成し、弓矢鉄砲を打ち出し、あるいは大木、大石を投げ出しける故、寄せること叶わず手負い討ち死に数多しにて何とすべき様もなし。さしもの大軍攻めあぐねてぞ見えにける。

大道寺新四郎は矢倉へ登り、寄せ手の様子を見て諸軍に申しけるは、「さてこそ寄せ手退屈して油断の体に見えたり。今宵ひとつ夜討ちして敵を追い立つべし。その用意せよ。」と、軍士を選び、その面々には、山住八郎、石楯五郎、村上七左衛門、戸根川亀之助、江戸崎六郎左衛門、塩川徳蔵、植渕作之丞、轟市兵衛、春日四郎、これを始めとして逞兵三百余人、皆々短刀にて身軽く出で立ち、人は眞を含み馬は轡をかませ、十六日八ッ時、中曲輪へ押し出し、景勝の備えを寄せる。おりしも小降りの雨、もっていかがせんと思う内、漸く扉開きければ時分はよしと時の声を揚げ藤田能登守が陣へ付け入ってここかしこへ火を懸け、東西に打ち、南北に馳せ千変万化に戦うたり。寄手はついに戦い疲れ、殊に雨天故、何の備えもなく打ち伏していたる者共、不意を打たれ、さしもの藤田大き驚きあわてて戦う心もなし。あまつさえ敵は名高き大道寺新四郎、難なく藤田が陣を討ち散らし、また安田が陣に打ち入りける。安田もたまらず敗北す。これによって景勝の本陣へ乱れ入り四方八面へ打ち散らし、これに気を得て城中の者も我も〳〵と討って出て勇を振るい戦えば、依田、小笠原の陣も散々になりて討たる者数を知らず、右往左往逃げ散ったり。

中にも真田が陣ばかり備えを堅め控えければ、これを見て大道寺軍をまとめ城中へ帰りける。この度真田かく厳しく備えずんば、寄せ手上州の地に足を留めること

叶うまじ。以て大将の身上危うかるべきに、かく夜明け方に退却〳〵。さて討死三百余人、手負い五拾四人、討負(死)手負その外数多しなり。かくの如く寄手大軍故、敵を侮り大いに敗北、無念骨髄に徹して怒りけれども詮方なく、殊更この城堅固なれば関東数多の城、如何して攻め落さんと皆々茫然として控えたり。

これにより、諸将景勝公の陣に会合して評議にこそは及びける時、真田申しけるは、「急に攻めなばいよいよ敵に気を得させ申すべし。さりながら、大道寺程の勇士なりといえども攻め落とさいで置くべきか。しかしながら味方においても討負(死)手負多かるべし。しからば今無念を押さえて民家を放火し、麦作を焼き捨て、敵の勇気を疲れらかし、箕輪なんど繋ぎ城を攻め落とし外々の城落しなば、松枝の御城も手に入るべし。この儀如何。」と述べければ　利家公手を打ちて、「さてさて驚き入りし真田殿のことばかな。我々方は無念を松枝に残し一途に攻め寄せる所なり。これを押さえ、外を攻めるに安しに付き、難義を除き善悪の道明らかに聞こえ、尤も至極なり。各々如何。」と仰せ有る。上杉も十分無念有りといえども、その利、分明に聞こえしかば、尤もと承知せられ、忽ち評定一決して、まず松枝を向いて城を構え、柵をふり備え厳しく人数を立て置き、民家を焼き捨てて味方の意を示し置き、軍勢を卒して前橋へぞ押し行きける。

松枝の城中の大将は、夜討ちを成して大いに勝利を得て、討ち取りし首共を城の外へ懸け並べ、敵の、怒りによって再度寄せ来たらば、上州に足を留めさすまじ。さりながら、心憎きは眞田なり。この度備えを厳しくせずんば大将の首を取り、とくにもこの国を追い立つべきに、残念至極なり。この上は真田と見受けなば無二無三に切り入り、彼が首を得ずんば退くまじ。皆々その心得有るべし。兵粮、矢砲たくさんなり。更に恐るるに足らわず、と勇む。

寄手は民家並びに作物を焼き捨て乱暴しける故、城内、案に相違し、大道寺矢倉に登り、これを見定めて、この城を残し置き脇城を攻めると覚えたり。

「我、是までこたえて大敵を悩ます事、武勇何者にか恥ずかしからん。ことさら沼田の城に立て籠もる猪又能登守、彼が血気よりこの度の合戦とはなりしものなり。無念の至り。当家の滅亡遠きにあらず。人はともあれ、能登守ばかりはかくはなき筈、見よ〳〵一戦に城を開き味方の弱みを顕すべしかりといえども、気を落とすなかれ。たとえ如何様の事あるとも我々父子は君恩に備える命、必ず恥辱を請けまじきぞ。今しばし見合わせ、敵の案咎をさぐり、謀をもって打ち破り、千変万化して叶わぬ時は死んで三途も同じ道たるべし。」と、それより矢倉の表へ諸将を集め評定にこそ及びける。

天正拾八年三月二日北国勢碓氷峠に陣を初め、三月八日に城を攻め初め十日まで、同十日城方より夜討ちなり。

さるほどに、北国勢並びに信州勢、武州城々を攻め落とし、またまた松枝城に取って返し、城方の変わりも有るやと暫く控えける。城方にては、或いは夜討或いは朝懸り、千変万化して寄手を悩ましける時に、寄手の諸将評定有りしかば、かく一城に陣取り、小田原落城は何に面目有らんや、この上は死を一挙に究め、味方死骸を足留めとし、一時に乗り崩し討ち取らんと評定一決して、城を十重二十重に取り囲み攻め立てる事雷雲の如し。

されども城中少しも屈せず、大道寺父子士卒を下知して鉄砲を撃ち出す事雨の如く、これによって寄手猶予する所を、大手を押し開き大道寺新四郎兵を卒し一陣に進み出で、前後左右より突き伏し薙ぎ据え、鉄壁も砕き大山も崩るるばかりおめき

さけんとて打ち立てる。音に聞こえし新四郎、難無く寄手の陣を打ち破り、猛威を顕し戦いける。

これを見て上杉の先将、藤田能登守真っ先に進み、「かかれ〳〵」と下知を成す。横合かからんとするを見て、寄手、新手を代えしぞ引き入れと退く所を、加賀の先陣、長九郎左衛門、山崎長門守、奥村伊予守、永橋彦三郎、前田又四(次)郎、村井出雲守、遠山佐渡守、篠原出羽守、士卒励まし戦いたり。堀際まで打ち破り、風に木の葉の散る如く乱れ入りてぞ見えにける。山崎長門守これを見て、同じく鉄砲の手を進め槍をひねって、新四郎をめがけ突きかかる。新四郎「推参なり」と言うままに槍を添えるとみえしが、長門守が草摺をつかんで馬よりどうど引き落とし、既に討たるると見えしに、郎等駆けつけ立ちふさがって長門守を救い散々に戦いたる。

かかる所に、前田又四郎手勢を下知して、いずれの時をおかず外曲輪を攻め破り、前田が臣士河内山半左衛門、一番に塀を乗り越え敵の陣屋へ火を放し、前田又四郎なおも進んで外曲輪に向かいて攻め討つほどに、広瀬藤左衛門、原九郎左衛門、河合又右衛門、堀江酒造之進大いに勇み進んでついに塀を打ち破り、外曲輪に乗り込み四方に火を掛ければ、小屋〳〵一同に燃え上がり猛火盛んなれば、城兵等大いに驚き引き退くとするを、敵の又四郎に先をかかられ無念に思い、大道寺を討ち留めんとの敵に続いて打ち入ったり。これを見て寄せ来る大軍潮の湧くが如し。我々も〳〵と込み入ったり。

大道寺新四郎は弥猛(やたけ)に思えども、大敵凌ぎ難く二の丸指して引く所を、また追い打ちにせよと群がり寄るを、憎っき敵の振る舞いかなと門前に唯一人馬を乗り据え大笑いと成り、敵をはたと白眼しその顔勢は進んだ敵も後ずさり、誠に唐土三国の戦いに長坂橋の戦の百万騎を白眼返せし燕人張飛が勢いにこれには過ぎしと見え

にける。かかる所へ父の駿河守本丸より馳せ来たり、早く引き取り疲れを休め、重ねて恥辱をすすぐべし、と下知をなし、静々と引き入りたり。その勢いに恐れけん、追い来る敵も有らばこそ、心安しと門戸を閉め人馬の息をぞ休めける。寄手も外曲輪を乗り崩し、日も夕陽に傾きければ同じく陣払いして休みける。

時に、前田又四郎、河内山半左衛門を招き申しけるは、「今宵子の刻ばかりに及んで密かに城の角より塀を乗り越え、城中に忍び入りて陣中に火を放せ」と下知せられければ、河内山は畏みて、物に馴れたる足軽を選び出し、身軽出で立ち数十人を相随え、夜半に及んで城中に忍び入り、風上に火を放ちければ、折節西風激しく、火は天を焦がす。前田又四郎これを見て、時あらば今ぞと下知をなし、手勢急に打ち進み難無く二の丸曲輪へ乗り入ったり。城兵等、思いよらざる炎火なり、と敵の勢いに度を失い、討たるる者数知らず、我先へと本丸にぞ逃げ入りたり。この節、前田又四郎（利家の甥）は四万石を領すとなり。

かくて松枝の城主、二、三の丸を攻められ今は本城ばかりになりけるといえども、いささかもって気を屈せず防ぎける。前田肥前守利長（これは大将の嫡男なり）鉄砲大将岡田権左衛門、大強の者なり。諸勢に竹束を担がせ攻め近づきければ、前田肥前守利長これを見て、岡田を討たせては叶うまじとて横山大膳を差し遣わし、岡田に力を添え士卒を励まし攻め寄せけり。城中より木石を投げ出しければ進み兼ねたる所へ、権左衛門が郎等、関平右衛門、同じく又八郎、長尾宗三郎、須賀豊四郎、味方を追い抜け駆け進む。

これを見るより、大道寺新四郎城の戸押し開き、長（九郎左衛門）が備えに真一文字に突き入りける。中にも大道寺が郎等、玉澤六右衛門（この者は始終新四郎が側を離れず働く故、新四郎勇気屈せずとなり）真っ先進んで駆け出でける。その外、一騎当千の

勇気、前後左右に随えり。玉澤槍を合わせて暫く戦いけるに、玉澤手練上達なりける故、終に関を突き伏せたり。これを見るより関又八郎、兄の敵逃さじと駆け寄る所を、新四郎脇槍を入れて難無く弟又八郎を突き落としける。城の勇士これに気を得て我先にと突き入れ、戦い激しければ長（九郎左衛門）が備え大いに乱れ、長尾宗三郎、須賀豊四郎を初めとして屈強の者十騎ばかり枕を並べて討死す。

長九郎左衛門大いに怒り、自ら槍を提げて獅子奮迅の荒れたる勢い、群がる中へ突き入り、大道寺が頼みとしたる玉澤を初めとして城方を数十騎突き伏せたり。長が郎等、堀内権左衛門、城方の強将河越半四郎と槍を合わせて終に（討ち）取りければ、城兵散々に乱れ退くを、長九郎左衛門真っ先に進んで突き入り、「討ち取れ」と呼ばわり〳〵戦いけり。新四郎既に危うく見えし所に、父駿河守猛虎の威を現し、秘術を尽くし戦い、難無く我が子を救い、寛々と引き入れける。長が勢いなおも討ち取らんとする所を、矢倉より打ち出す鉄砲霰の如し。進み兼ねて無念ながら控えたり。その外、越後、信州三組の諸軍、四方を取り巻き息をもつかず攻め立てる。早、落城にも及ばんと見えける。城兵少しもたゆまず鉄砲、矢、石を惜しまず打ち出す故、手負数多くなれども入り替わり〳〵昼夜の分かちなく攻め戦う。城中小勢にして大いに疲れ頼り切れたり。強将多く討死す。

ことさら兵粮乏しく矢種も尽きん時に、駿河守は我が子に向かい申しけるは、

「我、北條家に数代の功恩、この時に報せんと思えども、この度父子一所に篭城、今更詮無き事ながら当家の運はこれまでなり。我々父子はかくまで篭城し敵を悩ます。内外が城までも救うべきに、敵の来らざる先に開け退き、あるいは降参をし、言語に絶する有様なり。我々父子身に及ぶ程戦うべし。今は勢力疲れて本城を迫り明日を待つべからず。君の為に身を亡くすは臣の道なり。しかれば、我々父子自害

して数万の士卒の命を救い、冥土の旅を心よくせんと思う。この上死力を尽くして人の命を失わん事無益なり。この事汝如何と思うや。」と仰せければ、新四郎涙を流し、「有り難き父上のご所存、我々父子、今かくまでにして切腹せんに何者か拙きと云わん。さあればご用意しかるべし。」と申し上げければ、駿河守大いに悦び、長九郎左衛門の城に使者を差し越しける。その口上、「我々今本陣に迫りいかんともすべき様なき、死力を尽くして戦い討死致さん事、武士たる者の常の習い。さりながら、この上は我々切腹致し、本城に篭もりあるところの武人相助けたき所念に候間、この事しかるべき様のお取り持ちに預かりたし。それとも、お聞き済みこれ無くば元より覚悟に及ばず。何分よろしくお指図に仕るべし。」と慇懃に申し送りける。

長九郎左衛門大いに感じ味方の陣へ軍師を立て、攻むることをなだめ、その大将利家卿の陣に赴き注進に及びける。利家卿神妙に思し召され、景勝公へご相談あり。「もっとも至極の大道寺が所存、感じるに余りあり。いかにも彼が心に任せ。心のままに計らうべし。」とありければ、九郎左衛門これを承り、先に来たる使者に我が使者を添え、酒三樽、肴数多く取り添えて、「この度仰せ遣わされし趣言上に及び候ところ、大将お聞き済み、御身の神妙の段感心浅からず、いささかながらこれを送り進上致し候。とくとく御用意しかるべし。」と申し送りける。

大道寺父子大いに悦び、諸将を招きこの段申し聞かせければ、一人もこの城を出でんと言う者なし。「何の為に惜しからぬ命を助けられ、後日に指さされん事この上の恥辱に非ずや。」と一同に申しける時に、駿河守涙を流し、「もっとも至極、嬉しく思うなり。さりながら、敵の将にこの趣を約せしかば、汝等が命落とさんこと返って我が所存を失う所なり。この上は一刻も早く城を出て、その身の榮を取る

べし。忠義として我が心に背かば不忠なり。」と利害を説き聞かせ、金銀数多く取り出しこれを分け与えければ、この上は是非に及ばずと涙を流しながらお請け申しける。

さて、心安しと、それより長九郎左衛門より検使請け、妻子を刺し殺し、大道寺駿河守五十八歳にて腹十文字にかき切り首を伸ぶる。旧臣木次(森)半九郎介錯して、同じく腹を切りたりける。新四郎生年十八歳、腹十文字にかき切りければ、介錯は長谷川九郎次郎、同じく腹切って返す刀にのんどを貫き死にける。この節は天正十八年四月下旬なり。

駿河守まで四代なり。先祖は大道寺とて江州立生の者なりしが、北條早雲と共に城を取り立てんと駿河国に赴き忠義を励み、小田原の城を相続せし七人の内一人なる故に、当時は北條家において三人の老臣と呼ばれし者なり。忠臣武者の末ぞ頼もしく、また哀れなりけれ。

大道寺落城は
天正十八年なり。それより文政九年までおよそ二百五十年になる。大道寺城跡は、安中御城主様御所持、高梨子村預かりなり。大坂落城は元和元年なり。それより文政九年までおよそ二百二十四年になる。
文政九年丙戌正月吉日
西上州碓氷郡新堀村
小板橋氏
十六歳書